

＜日本レジャー・レクリエーション学会第43回学会大会  
震災対応委員会企画 於：東北福祉大学＞

絆をつくる グループ討議報告  
— 基調講演・シンポジウムを通して感じたことを述べ合う —

山崎 律子<sup>1</sup>

BE BONDS BETWEEN OURS

Group Discussion from the Keynote Address and the Symposium

Ritsuko Yamazaki<sup>1</sup>

1. はじめに

この特別セッションは、東日本大震災発生から2年8ヵ月経過した現在（2013年11月9日）、被災者と本学会および全国の本学会員との絆がどのようになっているかを検討することが主なねらいであった。この意図を達成するために“本学会大会における基調講演ならびにシンポジウムを通して感じたことを述べ合う”機会をつくり、小グループに分かれての話し合いを実施した。以下、その概要を報告したい。

2. 実施日時・参加者および人数・方法

(1) 日時

2013年(H25)11月9日(土)16:10～17:10  
(予定は15:50～17:00であったが、遅れて始まった)

(2) 参加者

- ① 田中伸彦、吉原さちえ、坂口正次、鈴木秀雄、二重作昌満、
- ② 嵯峨 寿、沼澤秀雄、上野直紀、青木康太郎、下嶋 聖、
- ③ 麻生 恵、師岡文男、南条正人、島崎百恵、清宮啓太、町田怜子、
- ④ 浮田千恵子、前橋 明、金 賢植、粥川道

子、上野 幸、石井浩子、

- ④ 迫 俊直、堀江久樹、土屋 薫、廣田治久、高崎義輝、渡邊真也

山崎律子（敬称略、順不同、○はグループ）

(3) 参加人数…29名

（ゲストおよび大会出席学会員）

(4) 方法

- 1) コーディネーターのオリエンテーションに続き、同所から複数出席の場合は分散して、5グループに分かれ（1グループ5・6名）、それぞれ司会、記録、発表者を決め、自己紹介から始めた。
- 2) 討議・発表・まとめの実質時間は、約40分であった。
- 3) 発表者（発表順）第1グループから順に各発表は5分で行われた。
  - ① 田中伸彦…東海大学
  - ② 嵯峨 寿…筑波大学
  - ③ 島崎百恵…東海大学
  - ④ 石井浩子…京都ノートルダム女子大学、金 賢植…早稲田大学
  - ⑤ 廣田治久…余暇問題研究所
- 4) まとめ…コーディネーター 山崎律子

1 余暇問題研究所代表取締役・震災対応委員会委員長  
President & CEO, Japan Institute of Leisure Services and Education, Co.  
Chaire: Coping Committee with the East Japan Disasters

## (5) 討議・発表要旨

- 1) このままであると、震災が風化していく恐れがある。それはバランスのとれた学会として立ち位置を考え、個々がバラバラでなく、学会員も被災している事実を踏まえ、本学会としても個人の生きる喜びを考えていく必要がある。
- 2) どのステージで行われた支援活動の良し悪しを整理していくことが大切である。できれば本学会とレクリエーション協会との連携も視野に入れたい。
- 3) 本学会は、さまざまな分野があることを踏まえ、各分野の位置づけや全体像がわかるチャートをつくる必要がある。それによって被災者のニーズを把握・整理したり、新しい研究テーマを見出したり、学会ならではの提言をすることができる。
- 4) 良い都市計画は、安全に住みやすい環境空間が必要である。したがってソフト面とともにハード面も考えていくことが本学会に求められる。
- 5) 被災者は、個人的にも集団的にもどのようなニーズがあるかを把握し、受動から主動・自立に向けて中長期への提言（たとえば公園を多くするなど）を行い、本学会の持つ力や役割を明確化する。
- 6) シンポジウムでは、男性ボランティアが少な

くなっているという。その理由の解明（ニーズの把握、実践と客観的データなど）が必要である。

- 7) レクリエーションが現場で、今求められているものは何かを把握し、継続していくことが必要である。それとともに方法論の明確化(経済的なバックアップが必要)。今こそレクリエーションがどのように社会的に認められているのか取り組む時期であろう。

## (6) コーディネーターのまとめ要旨

参加者全員（会長、副会長も出席）が活発に自分の考えを披露したことに感謝。加えて今本学会として実現可能な提案等があり、今後の学会大会でも、なんらかの形で、震災後の状況を報告する場を設けていきたい。

## 3. まとめ

以上がグループ討議の要旨である。震災対応委員会として本企画当初に狙ったことは、現在本学会員がこの大震災をどのように感じているのかを検証したいことであった。もちろん幾多の提案・ご意見があり、当初の目的を遂行できたと感じている。それに加え、少なくとも全国的に散らばっている学会員同士が小グループで話し合った機会を得たことは、望外の喜びであった。参加してくださった方々に深く感謝したい。